



公立大学法人
宮城大学
MIYAGI UNIVERSITY

日本看護系大学協議会

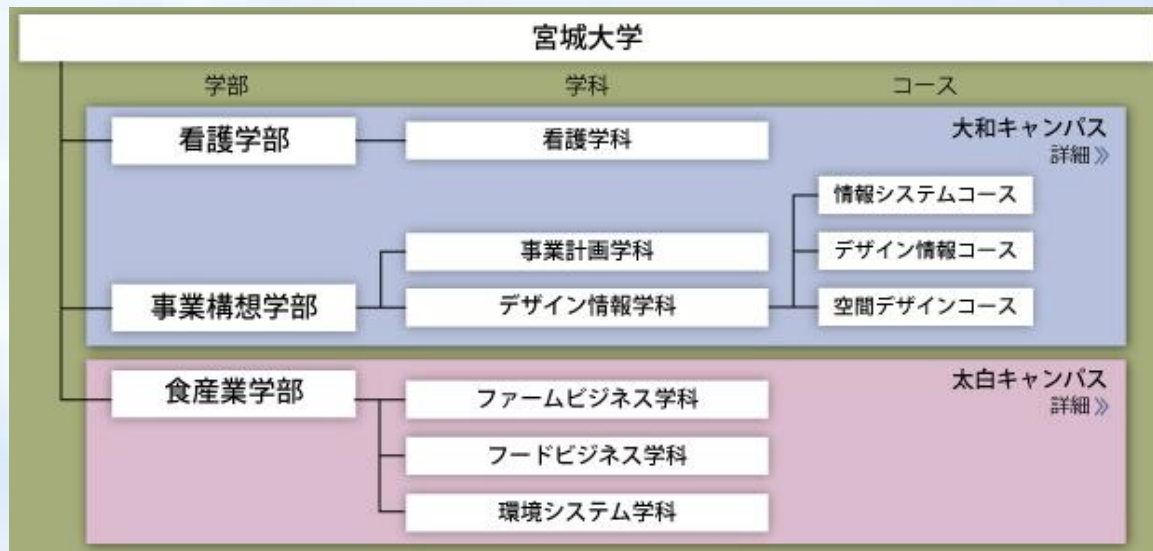
「東日本大震災災害看護支援金における助成金事業」報告会

ボランティア体験しゃべり場

ー東日本大震災ボランティア体験を分かち合おう

公立学校法人宮城大学 精神看護学 講師 阿部幹佳

2012年6月18日 日本教育会館一ツ橋ホール



公立学校法人宮城大学

住所：宮城県黒川郡大和町学苑1番地1

東日本大震災宮城大学看護学部取り組み

- ▶ 発災直後学部教員全体で沿岸被災地での支援活動
- ▶ 実習施設・避難所等での支援活動
- ▶ 教員の専門性を生かした継続的な支援活動
- ▶ 災害時の応急処置・ボランティアのメンタルヘルスに関連した公開講座の開講
- ▶ 学生と教員・他大学との連携による、泥出し・傾聴ボランティア活動・高齢者への健康支援活動の実施
- ▶ 教員の専門性を生かした自治体復興計画等の支援
- ▶ 学内外より研究資金を得て、災害看護に関する支援・研究の実施

1. 事業概要 ボランティア体験しゃべり場

ー東日本大震災ボランティア体験を分かち合おう

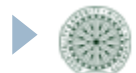
- ▶ 時期:2012年2月
- ▶ 場所:宮城県仙台市中心部
- ▶ 活動者:精神看護学を専門とする教員(看護職) 4名
- ▶ 対象者:
 - 東日本大震災に関連したボランティアを行っている人
- ▶ 主たる事業内容:
 - 心理教育を目的とした講義
 - 体験の共有を目的としたグループワーク

↓

 - ▶ ボランティアのメンタルヘルス支援を目指した

2. 事業の背景(1)

- ▶ 生命の危機を感じた大きな揺れ
- ▶ 被害を受けても、より被害が大きかった地域でボランティアを行う人々がいた
- ▶ 居てもたってもいられないような惨状
- ▶ ボランティア学生の「自分に何が出来ただろう」という無力感に似た発言
- ▶ 宮城県内に居住する者は、みな被災者であった
- ▶ 被災範囲が広範であり、また被害が大きかった



2. 事業の背景(2)

- ▶ 被災者が支援に当たる場合、対象者に強い共感を持つ一方、自らの被災が大きいほど無力感や戸惑いを経験する
 - ▶ 近年、災害救援者へのサポートは重視され、対策が取られるようになった。しかし、ボランティアへの支援は、十分な体制はない
 - ▶ その理由として考えられたもの
 - ・ボランティアは自己責任で行う
 - ・ボランティア組織の中でサポートは行われる
 - ・災害時は、ボランティアよりも優先すべき対象者が多い
- ↓
- ▶ 以上の理由から、本事業を企画し、実施した

3. 方法(1)

- ▶ 時期:2012年2月

- ▶ 場所:宮城県仙台市周辺
参加者のプライバシーが確保出来る会場

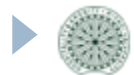
- ▶ 対象者:
 - ・宮城県内に居住し、東日本大震災に関連したボランティアを行っている人
 - ・宮城大学のHP、新聞などで広報
また、県内の公共施設、大学、県・市町村社会福祉協議会等に案内をし、参加希望者を募った

3. 方法(2)

- ▶ 事業内容:
- ▶ 心理教育を目的とした講義
 - 精神保健に関する内容 30分
 - ボランティアのストレスとセルフケアについて 30分
- ▶ 体験の共有を目的としたグループワーク 90分
- ▶ ボランティア体験記録誌への投稿依頼(任意)

3. 方法(3)

- ▶ 倫理的配慮:
- ▶ 本事業への参加者の匿名性を保持、プライバシーを遵守し、報告をまとめた
- ▶ 本事業で知り得た参加者の個人情報管理を徹底した
- ▶ 参加者の匿名性を保持、プライバシーを遵守した上で、看護職が行った災害後の活動として本事業の内容を、学会等で発表したい旨を、文書と口頭で説明し、自署にて同意を得た



4. 事業結果(1)

▶ 参加者概要

- ・2012年2月 6名 (申込み8名)

 - 年代別: 20代3名、50代1名、60代1名、70代1名

▶ 事業内容①心理教育を目的とした講義の内容

▶ 1) 精神保健

- ・人格の成熟と情緒体験

 - ・防衛機制

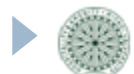
 - ・グループワークの意味

▶ 2) ボランティアのストレスとセルフケア

- ・ボランティアのストレス

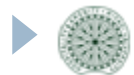
- ・ボランティアのセルフケア

- ・被災者の心理状態



4. 事業結果(2)

- ▶ 講義後の反応:
 - ▶ 中年期以降(50歳代～)の参加者の語り
「ボランティア活動にストレスを感じたことがない」
「ボランティア活動は、楽しいことばかりだ」
 - ▶ 青年期(20歳代)の参加者の語り
「ボランティア仲間との関わりで、自分にストレスがかかっていたのだと、講義を聞いて気がついた」
「ボランティアを続けるうちに、ボランティアを休みたいという気持ちが生じていたのに、それを心に押し込めたままだったので、自分は苦しかったのだと気がついた」

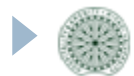


4. 事業結果(3)

- ▶ 事業内容②体験の共有を目的としたグループワーク

- ▶ グループワークのルール
 - ・参加者が話せる内容を話す
 - ・黙って聞いているだけでも良い
 - ・ここで聞いたことは外部に漏らさない
 - ・参加者の話に安易にアドバイスせず耳を傾ける
 - ・つらくなったら部屋から退出して良い

- ▶ 教員がグループワークのファシリテーターとなり、参加者が語りやすいようにする



4. 事業結果(4)

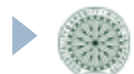
- ▶ グループワークでの語り
- ▶ 中年期以降(50歳代～)の参加者は、ボランティア活動が無理のない範囲で行っていること、ボランティア活動が生きがいになっていることを生き生きと語った
- ▶ 一方、青年期(20歳代)の参加者は、中年期以降の参加者の語りに圧倒され、グループワークでは思ったように自分の活動や感情を語りきれなかったのではないかと、その態度から考えられた
- ▶ また、所属するボランティア組織には、ボランティアで困った時に相談出来る体制が整っていないと語った

4. 事業結果(5)

▶ ボランティア体験記録誌への投稿

→青年期の参加者2名のみ

壮年期以降の参加者は、生き生きと活動を語ったことから、自らの体験を広く知って欲しいというニーズがあったように思われた。参加者からの発言から、記録誌を配布する範囲を参加者のみとしたことが投稿につながらなかったと考えられた



ボランティア体験記録誌

ボランティア体験
しゃべり場

東日本大震災のボランティア体験を分かち合おう

宮城大学看護学部
精神看護学領域

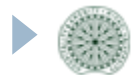
2012年3月発行

ボランティア体験記録誌

→ボランティア自身がその活動
の価値を再認識できると考え
作成した
配布範囲は、投稿者のみ

5. まとめ(1)

- ▶ 本事業に対する参加者が少ない
 - 多くのボランティアは「体験の共有は必要せず、意欲的に活動している」と考えられる
- ▶ ただし、一部のボランティアに対しては本事業の継続が必要であると考えられた
 - 青年期(20歳代)にボランティアをする者が、ボランティア活動で生じた悩みを相談する場がなく問題を解決出来ない可能性がある



5. まとめ(2)

- ▶ よって、ボランティアへのメンタルヘルス支援の体制を整えることが必要である
 - 本事業のような、心理教育とグループワークにより、ボランティアは、活動で生じた悩みを表現出来、その対処方法に気付くことが出来る。必要時、個別支援も行う